

## 9月1日 年間第22主日

シラ 3:17~29 ヘブ 12:18~24 ルカ 14:1,7-14

### 1. ルカ

v.11 「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

このイエスの言葉、およびそれに関連するいくつかの言葉が、福音書の中のいろいろな場所で使われていて、初代教会が旧約の伝統から、またイエス御自身の口から、その深い意味を聞き取って、彼らの宣教の一つのキーワードとしていたことが分かります(1:51-53, 18:14, 22:26、マタ 23:12、ヨハ 13:14-15)。それは何よりも、イザヤ書に預言された苦難の僕として御自身を献げられた神の子イエスのへりくだりへの、信仰と感謝と賛美に伴う言葉でありました(フィリ 2:6-11、1ペト 2:21-25)。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人々の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(マコ 10:45)

ですから、これを単なる人間の道徳や美德のように理解してはなりませんし、まして神に対する功績になるなどと勘違いしてはなりません。v.14の「…あなたは報われる」や、マタ 5:3-10の「幸いである」を、“功績を獲得する”ことのように思い込んでいる人は、“信仰による神の義”(ロマ 1:17, 3:21-4:12)がまだ分かっていないのです。

救いは“恵みにより、信仰によって、賜物として神から与えられる”(エフェ 2:8)のであって、人間が自らの功績によって獲得するものでは決してありません。この福音書のテキストは、18:13で徴税人が祈っている「神様、罪人のわたしを憐れんでください」の線上で、理解するのが正しいのです。

### 2. ヘブ

vv.18-19 「あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の声に、近づいたものではありません。」

イスラエルの民はシナイ山で、死ぬほどの恐ろしい体験をし(出 19:10-25)、モーセに向かって「あなたがわたしたちに語ってください。わたしたちは聞きます。神がわたしたちにお語りにならないようにしてください。そうでないと、わたしたちは死んでしまいます」と言いました(出 20:19、申 18:16)。金の子牛の不祥事後、二度目にシナイ山に登ったモーセは、「主が激しく怒りに燃え、あなたたちを滅ぼされるのではないかと恐れた」と、後になって語っています(申 9:19)。

私たちキリスト者もそのように、否それ以上に神を恐れる会衆であるべきなのです。ただその恐れは、“御国(の約束)を受けている感謝に伴う畏れ”(12:28)であることを、強調しなければなりません。私たち教会は、天のエルサレムであるシオンの山に近づいているのです(v.22)。それは、神の国を受け継ぐ“長子の特権”(12:16)を与えられた者たちの都であり、キリストの血によって贖われた(新しい)イスラエルの民の集会です(9:12, 10:19、エフェ 1:7、黙 7:9-14)。

「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わい、これに参加している。」(典礼憲章 8)  
私たちの主日のミサの“交わりの儀”が、このような“感謝を伴う畏れ”を、会衆一同が共有する場であり  
ますように。「実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。」(12:29)

### 3. シラ

v.20 「主の威光は壮大。主はへりくだる人によってあがめられる。」

言うまでもなく、この「へりくだる」とは神に対してのことであって、単なる人間の道徳や美徳として理解してはならないものです。同様に v.28 の「高慢」も、何よりも先ず神に対することを言っているの  
であって、それを「早合点して」(3:24)、ただの“偉人の傲慢”(マコ 10:42)として片付けてしまっ  
てはなりません。

ここで、カトリック教会のミサの実践基準であるローマ典礼様式(典礼憲章 4)について、一言述べてお  
きたいと思います。私はプロテスタントの出身なので、プロテスタント諸派の礼拝の実態についてはかなりよ  
く知っています。そのような経験を踏まえた上で、今から 30 年以上前に「ローマミサ典礼書の総則」を学  
び始めて知ったことは、それが神に対する畏れとへりくだりに徹した、教会の本来の伝統に根ざした典礼の  
実践的解説書であるということでした。

しかし、第二バチカン公会議に発する典礼刷新の大波が、我が国の教会で十分に理解されずに通り過  
ぎた今、多くの小教区におけるカトリックのミサが、無知と怠慢によってただの形式主義、それも無節操な  
思いつきによって混乱した形式主義に墮してしまっているというのが、この十数年の浜松教会におけるミサ  
体験を通しての私の偽らざる嘆きです。皆さん、たいへん、うやうやしい。しかし、神に対する本当の畏れ  
が、神に対する本当のへりくだりが理解されているだろうか …… と。

フランシスコ会訳の「聖書(合本)」が発行されて、すでに二年を過ぎました。カトリック教会の熱心な信  
者はもう二回目、もしかすると三回目の通読に入っておられる頃だと思えます。そのような方々が、聖書  
を通して御言葉を聞くことにより、カトリックのミサが神に対する畏れとへりくだりに徹したものとして再生  
するために、主によって用いられる日が、一日も早く来ますように。主よ、あわれみたまえ。

アーメン、ハレルヤ。

## 9月8日 年間第23主日

知 9:13～18 ファレ 9b～17 ルカ 14:25～33

### 1. ルカ

vv.26-27 「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」

福音書の物語り中では、この関連のイエスの言葉がいろいろな前後関係の中で使われていて、それが原始教会の宣教のキーワードの一つであったことが分かります。(ルカ福音書では 9:23-24, 18:22,28-30) それは、“神の知恵であるキリスト”、“十字架の言葉”、“使徒たちを通して宣教された福音”(Iコリ1:18～2:16 参照)と、深く結びついて理解されなければならないものです。

「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。」(Iヨハ4:10) 「罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。」(IIコリ5:21) 「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ロマ3:23-24) 羊のために命を捨ててくださったキリストに“ついて行く”とは、福音を信じ、受け入れ、救いを得ることに他なりません。

ところで、このように御自分の命を捨てて犠牲を払ってくださったイエスに倣って、“自分の持ち物を一切捨て”(v.33)さえすれば……、あるいは何らかの形で大きな犠牲を払えば、それがキリスト教的な“功績”、あるいは“徳”になるという考え方が、昔からかなり一般的であったように思われます。しかしそこには重大な落とし穴が潜んでいました。キリストは何のために、そして私たちは何のために……という、犠牲の目的が無視されないまでも、曖昧で主観的なものにされるという危険性です。

使徒たちの宣教が目指したのは、信じる人々が「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」(フィリ3:14)ことでもあります。その宣教には、「神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように」(エフェ1:18)という祈りが伴っているのです。ただ犠牲を払うということではなくて、もっと深い意味で、あなたにとって本当に大切なものは何なのかが問われているのです。

世の中で、平和や安全、正義や公平、家族や自分の命がどんなに大切であっても、“罪の赦し、からの復活、永遠の命”はもっと遙かに大事であるということ、あなたは理解しているでしょうか。

### 2. ファレ

v.16 「愛する兄弟として、……愛する兄弟である……。」

私たちはオネシモがかつてどんな人物であり、そして今どんな人物になったのかを知ることは、全く出来ません。「以前はあなたにとって役に立たない者でした」(v.11)とは、ダメな人間であったということではありませんし、「今は、役立つ者となっています」(v.11)とは、有能な善人に変身したということでもありません。私たちが注目すべきただ一つのことは、彼が共に神の国を受け継ぐキリストの羊になったということなのです。

そのただ一つの事実が、他のあらゆる事情に遙かに勝って重要であるということ、使徒パウロはフィレモンが理解してくれると期待したのです。

私たちのミサで、感謝の典礼の交わりの儀で、会衆一同が行列を作って小羊の食卓に与るとき、この兄弟姉妹の交わりがこの世のあらゆることに勝って重要であると、信じる事が出来る人は幸いです。

### 3. 知

旧約の知恵文学は、世俗の知恵から神の知恵、信仰の知恵まで、非常に広い範囲にわたって語っていますが、私たちキリスト者にとっては最終的に、「神の力、神の知恵であるキリスト」(I コリ 1:24)が関心事であります。「このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。」(I コリ 1:30) このキリストの福音を聞くことによってだけ、私たちは信じる事が出来、救いを得ることが出来るのです(ロマ 10:8-17 参照)。

世の中には、世間でも教会でも、「人の知恵に教えられた言葉」(I コリ 2:13)が圧倒的に語られていることは事実です。そのような現実から、だれも逃れることは出来ません。しかし、それにもかかわらず、聖伝と聖書を通して、また主日のミサを通して、主が多くの羊たちを「神の力、神の知恵でありキリスト」(I コリ 1:24)に出会わせてくださいますように。知恵によって救われる(v.18)ようになるために ……。

アーメン、ハレルヤ。

## 9月15日 年間第24主日

出 32:7～14 | テモ 1:12～17 | ルカ 15:1～32

### 1. ルカ

vv.28-31 「兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし兄は父親に言った。……すると、父親は言った。……」

主日になると、各地の教会に信者が集まって来て、ミサや礼拝、聖会などと呼ばれる集会被守られます。外見上はどれも同じキリスト教の公式行事なのですが、その内容や性格、目的や主旨といった実態は、驚くほど千差万別で、よく言えば個性的、悪く言えば勝手放題であると言うのが現実です。

カトリック教会のミサでは、前半のことばの典礼で聖書が朗読され、会衆は神のことばを通していわば神と問答をする体験を持ちます。この兄と父親の問答は、そのような背景で読むと、実感が湧いて来ると思えます。ただミサに出席している、ただ司祭の説教を聞いているだけで、神がわざわざ御自分で“出て来て”語ってくださる……、“神が、この終わりの時代に、御子によって語られた福音”(ヘブ 1:2)に私たちが出会い、神のことばを通して問答するという体験をしたことのない人も、まだ多いかも知れません。しかし、遅ればせながらカトリック教会でも、フランシスコ会訳の聖書(合本)がかなり普及したお陰で、しっかりと準備してミサに出席する信者が育って来ていることを喜びたいと思います。

羊や銀貨が悔い改める罪人の比喻に使われている(vv.7,10)のを、不思議に思うかも知れません。しかし新約聖書では“悔い改める”とは“向きを変える”という意味であり、旧約聖書の“立ち帰る”(エシ 3:14 他)と同じであることを先ず指摘しておきましょう。放蕩息子は帰って来たとき、神と父に対する罪を告白して、「もう息子と呼ばれる資格はありません」(v.21)と言いました。彼は立ち帰ったのであって、赦しと救いはただ神から与えられるのです。決して、私たちが自分の善行によって獲得するものではありません。

この譬え話は、ユダヤ教、特に初代教会時代のファリサイ派の立場に対する、キリスト教の弁明として語られました。ユダヤ教のラビの教えによれば、“救い”は神に対する人間の正しい行いと罪との多寡の割合に依存するのであり、さらに、不足する正しさを過去の義人たち(アブラハムからマカバイ時代の殉教者に至るまで)の功績を分けてもらうことによって補うなら、辛うじて得ることが出来ると信じられていました。

私たちのミサの開祭の部にある“回心”を解説して、ユンクマンは次のように書いています。「集会は、司祭の案内(集会祈願)で共同体となり、神の前に出る。……はじめに罪を告白するのは、そこに映る影のようなものである。神の前に出る教会の構成員は、罪にまみれた人間たちなのである。」(ミサ p.199) 私たちは“罪人ではなくなって”ミサをささげるのではなく、“自らの罪を認めて”神に立ち帰り、神聖な祭りを祝うのです。

### 2. テモ

v.15 「“キリスト・イエスは、罪人を救うために世にいられた”という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。」

キリスト者にとってこれほど自明であり、よく知られている福音の主題が、実際には多くの信者にとって実感を持って理解されているかという、むしろたいへん心もとないと言う方が当たっているように思えます。先ず何よりも、自らを神の前で罪人として自覚しているかということが問われねばなりません。洗礼の秘跡によって自分は罪人ではなくなったと、勝手に誤解してしまっている傾向が大いに見られるからです。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっている」(ロマ 3:23)、「あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいた」(エフェ 2:1)という聖書の言葉が、現在の自分にはすでに無縁になってしまったように考えているのです。そのような人には、「来るべき神の怒り」(1テサ 1:10)などという聖書の言葉は全く理解出来ないことでしょう。

しかし、キリストは“罪人だけを救うために”(ルカ 5:32 参照)来られました。

### 3. 出

v.11 「モーセは主なる神をなだめて言った。……」

近代人は、神が怒るという聖書の記述を、古代の幼稚な思想として無視する傾向がありました。私のささやかな経験では、司祭や牧師の説教で、神の怒りがその主題として取り上げられるのを聞いたことが一度もありません。それほど私たちは、聖書があるがままに読むということが難しいのです。

旧約聖書では、怒りという表現は人間にではなくて、圧倒的に神について用いられています。イスラエルの歴史は、預言者たちによれば、神の怒りの出来事の連続として説明されているのです。新約聖書でも、福音は終末の日の「来るべき神の怒り」を前提にしてのみ、正しく理解することが出来ます(ルカ 3:7-9、ロマ 2:5, 5:9、1テサ 1:10)。

モーセが神をなだめたというので、拍手するような読み方をしたくなる人は、神への畏れを知らないのです。イスラエルを顧みて救う権能は、モーセにはなくて、神だけが持っておられる。主はその全く一方的な愛のゆえに、「かたくなな民」(申 9:6)であるイスラエルを選び、導き、助けられました。

神の怒りを正しく理解する人だけが、神の豊かな慈愛と寛容と忍耐(ロマ 2:4)を、感謝して信じることも出来るのです。「あなたがたの救われたのは恵みによるのです。」(エフェ 2:5)

アーメン、ハレルヤ。

## 9月22日 年間第25主日

アモ 8:4～7 | テモ 2:1～8 | ルカ 16:1～13

### 1. ルカ

v.9 「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」

現在伝えられているこの譬え話の本文は、そのままの形ではやや説明困難であって、適切な注解書の助けが必要なケースに当たると思います。素人が自分勝手に解釈するのがいちばん危険で、間違っただけが行われてしまったりします。信用のおける聖書翻訳者たちは、本文に対して決して勝手な解釈や用語の置き換えをしないもので、このケースでも口語訳、新共同訳、フランシスコ会訳のいずれも、たいへん苦労しながらも底本に忠実な訳文を提供しています。

注解上の問題点が二つあります。その第一は、この譬え話が 15:2 でファリサイ派の人々や律法学者たちを相手にしている 15章の物語りと 16:14-15 の記述に挟まれているので、v.1 の「弟子たちに …… 言われた」を無視すると、むしろ自然な流れになるということです。第二は v.9 の“友達”とは神のことであると理解するのが、最も適切であるように判断されるということです。人を永遠の住まいに迎え入れる方は神以外にはあり得ませんし、そう理解すると v.13 の結論が意味を持って来ます。

“神を友にする”ということと“富を天に積む”(12:33)ということが同じであって、しかもそれが何にも勝って決定的に重要であると強調していることが理解出来ると、むしろ“不正にまみれた富”(v.9)というやや過激な表現の意味も分かって来ます。

ところで、聖書の読者の多くが“ファリサイ派の人々や律法学者たち”を悪玉に仕立てて、彼らを糾弾するためにこれらの譬え話が書かれているように、しばしば思ってしまう。そしてそれに倣って現代のキリスト教も、権力者の罪を糾弾することが使命であると考える人々がかなりいるのです。世界的に、教会の社会活動が反体制的性格を持つことが多いのも事実です。しかし、その是非を論じるのは、この“学び”の目的ではありません。

ただ、福音書も、旧新約聖書全体も、その使信の目指している究極の目標は一つであって、その目標がここでは「永遠の住まいに迎え入れてもらえる」(v.9)ことだと語られているのです。私たちは、これまでこの目標のためにどれだけ真剣で忠実であったかと、今朝の朗読を通して問いかけられているのです。

### 2. テモ

vv.5-6 「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。」

これは、初代教会で洗礼志願者の教育のために用いられていたテキストからの引用と思われるもので、

現代の教会のカテケージスでも全く同じであるはずなのですが、この“すべての人”ということが、実際には必ずしもよく分かっていない信者が多いのです。この“すべての人”の中に王や高官たち(当時のローマの為政者の意)、また福音書に登場するファリサイ派の人々や律法学者たちが、当然含まれていることに気付かないのです。

現代のキリスト教が、すべて体制側にあるものを悪玉に仕立て上げて、自らは反体制側に立つことが使命であると主張するとしても、まさにその“すべての人”のために祈りと執り成しをささげているか(v.1)と問われた場合、否という答えが返って来るように思えるからです。「神は、すべての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられます」(v.4)とは、ただの綺麗事に過ぎないのでしょうか。

### 3. アモ

預言者アモスの不正糾弾の叫びを、あたかも富める商人たちへの宣戦布告のように読むことは、果たして正しいのでしょうか。実に、アモスの預言において初めて、神の民イスラエルこそが、神の裁きの対象以外の何ものでもあり得ないことが明らかにされました(3:1-2)。

先週の“聖書の学び”で、私たちのミサについて説明している「神の前に出る教会の構成員は、罪にまみれた人間たちなのである」という、ユンクマンの言葉を紹介しました。まさにその罪人を救うために、キリストは来られた(1テモ 1:15)ということ、聖書を通して学ぶことが重要なのです。

カトリック教会のカテキズムは、“原罪”を説明して、“犯した罪ではなくて、状態”、“原初の義と聖の欠如”という表現を使い、人間が自らの努力や心がけによってそこから脱することの出来ないものであり、キリストによる贖罪の教えと“対をなしている”と述べています(404～407)。

アモスの生々しい預言に真面目に耳を傾けることが、現代のキリスト者である私たちを、救い主イエス・キリストに立ち帰らせることとなりますように。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように。」(ロマ 11:36)

アーメン、ハレルヤ。



## 9月29日 年間第26主日

アモ 6:1～7    Iテモ 6:11～16    ルカ 16:19～31

### 1. ルカ

v.29 「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。」

v.31 「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。」

この金持ちとラザロの譬え話を、現代の格差社会における富裕層と貧困層に当てはめたり、自国民の社会的経済的安定を守ろうとするヨーロッパの国々とそこに押し寄せる移住者と難民の問題に結びつけて、教会の社会活動の論理付けに利用するとしたら、それは正しい聖書の読み方ではありません。ラザロが教会で、金持ちが教会が糾弾すべき体制側の人々であるなどという理解は、聖書自身の主張ではないからです。むしろ教会は、ラザロと金持ちの両者をその構成員としているのであって、問題は彼らがモーセと預言者、つまり“神のことば”に耳を傾けているか否かが、ここでは問われているのです。

多くの教会で、“聖書の会”、“聖書の分かち合い”、“聖書の学び”などと呼ばれる集会が行われています。しかし私の経験では、教会がそのような集会で聖書を学ぼうとしている目的が、ほとんど明らかでないままに漫然と、ただの勉強会や読書会、あるいはほとんど聖書と関係のない雑談会になっていることが多いのです。本当は、生ける神が、神の右の座に着いておられる天上のキリストが、聖書を通して教会に語っておられる福音を“共に聞く”という目的、すなわち共同体の会衆一同が「共に福音にあずかる者となる」(Iコリ9:23)という目標が、教会では決定的な意味を持っているのですから。

”神のことばを聞く”とは、神が聖書を通して語っておられる福音に耳を傾けることであって、そのことが抜け落ちただけの聖書の勉強をいくら積み重ねても、キリストの復活がもたらす救いに与ることが出来ないばかりか、「罪の赦し、からだの復活、永遠の命」を信じることに至り得ません。

### 2. Iテモ

v.12 「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。」

文脈上、信仰の戦いを戦い抜くということと、“この掟を守る”(v.14)とは同一のことを指しているのですが、これについて説明が必要であるように思われます。

歴史的に振り返ってみると、カトリック教会では“掟”という言葉は“信者に対する教会の教え”という意味で理解して来たように見えます。信者は“それぞれ自分の目に正しいとすることを行う”(土21:25)ではなくて、教会が与える宗教的・道徳的教えに従うのが正しいとされて来たからです。今朝の聖書と典礼の表紙にも、「主が再び来られるときまで、掟を守りなさい」と印刷されています。

聖書を読んでもみると、テモテへの手紙のどこにも“この掟”に該当するような掟の条項が見つかりません。それは恐らくテモテの受洗に際しての信仰宣言(v.12)や、v.13がそこから引用されている当時の信条

を念頭に置いているのであって、教会が「公に言い表している信仰」(ヘブ 4:14)のことだからです。

私たちキリスト者にとって、「信仰の戦いを立派に戦い抜く」ということが、共に福音にあずかる者となって「永遠の命を手に入れる」という方向で、もう一度理解され直す必要があるのです。信者一人一人が自ら聖書に親しみ、自分たちのミサ(ローマ典礼)への正しい理解を深めることが期待されます。聖書を学ぶことが、キリスト者の生活全体の中心であるミサ(総則 1)の充実という実りに至るためには、“典礼憲章”と“教会憲章”は必須の参照文献であることを書き添えておきましょう。

### 3. アモ

v.6 「大杯でぶどう酒を飲み、最高の香油を身に注ぐ。しかし、ヨセフの破滅に心を痛めることがない。」

現代の平和と繁栄を、経済的・文化的豊かさを、当然のごとくに享受しながら、切実な教会の福音的・信仰的破滅には気付くことも心を痛めることもない、そんな実態への警告を、確かに私たちは今朝、聞かされているのです。

現象としては、司祭および信徒の高齢化、若者が教会に寄りつかないということが、現代の我が国の教会の危機であるように見えます。しかし本当の危機は、教会の福音的・信仰的破滅にあるという切実な実態をこそ認めるべきなのです。カトリック、プロテスタントを問わず、我が国のほとんどのキリスト教諸教会に「主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇き」(8:11)が襲って来ています。

そのような、まさに神の裁きの対象である現代の教会に向かって、神が語っておられる招きの言葉を、もう一度感謝して聞こうではありませんか。「主は言われる。わたしを求めよ、そして生きよ。」(5:4)

アーメン、ハレルヤ。